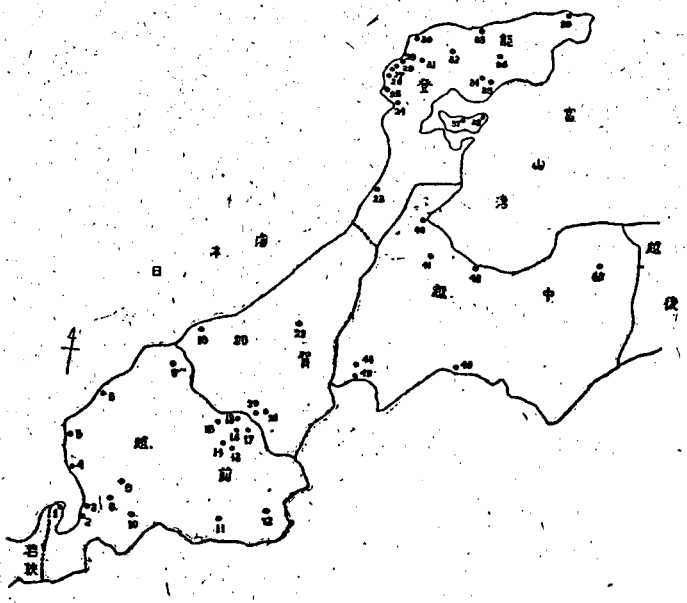
北陸道方言のイ音尾について

愛宕八郎康隆



県名	国名	地点番号	調査地点名	県名	国名	地点番号	調査地点名	県名	国名	地点番号	調査地点名	県名	国名	地点番号	調査地点名
福井	越前	1	立石	福井	越前	13	三谷	石川	能登	25	赤崎	富山	能登	37	向田
		2	杉津			14	勝山			26	剣地			38	祖母ケ浦
		3	大比田			15	岩屋			27	大泊			39	折戸
		4	河野			16	杉山			28	腰細		越中	40	氷見
		5	梅浦			17	谷			29	赤神			41	高岡
		6	大丹生			18	中野俣			30	皆月			42	四方
		7	細呂木	石川	加賀	19	橋立			31	門前			43	蛭谷
		8	大桐			20	大道谷			32	能登三井			44	西赤尾
		9	湯ノ尾			21	白峯			33	名舟			45	楮
		10	宇津尾			22	鶴来			34	瑞穂			46	猪ノ谷
		11	秋生			23	千里浜			35	甲				
		12	持穴			24	富来			36	笹川				

◎本文の用例注記中、F・I・Tとあるのは、それぞれ、福井・石川・富山県の略号として用いたものである。

一

北陸地方に、「ホーヤイノ。」（そうですよねえ。）のように、普通「ヤ」（です）に言うところを、「ヤイ」と言う事実が認められる。この「ヤ」から「ヤイ」というように派生をみたと思われる〔i音を、藤原先生の御命名にならって「イ音尾」[注1]と名づけたい。この種の事実は、[注2]近畿・山陽の地方にもおこなわれており、必ずしも北陸道方言に特有な言語事実ではないが、北陸地方には、やはり北陸道方言なりにの、方処的なあらわれ方が認められるように思う。

この小論では、主として北陸道方言において、今日、「イ音尾」がどのようなあらわれ方を示しているか。また、それがどのような表現効果をもたらしているかをみようとするものである。

二

北陸道方言の「イ音尾」は、それが文表現のどこにあらわれるかによって、おおむね、次の四つの場合に分けることができる。

すなわち、

(一)述部の末端にあらわれた場合

（例）①オンシ　ドコイ　イクンジャイ　ノー。
あなたはどこへ行くのですかねえ。（老女→老男）
F〔宇津尾〕

(二)文末部の末端にあらわれた場合

（例）②アッツイ　ノイ。お暑うございますねえ。（中女→中男）T〔西赤尾〕

(三)間投部にあらわれた場合

（例）③イマ　ホライ　カッチャマデモ……。
今それ勝山地方でも……。（老男→青男）F〔岩屋〕

(四)その他の場合

というように整理して受けとることができる。

以下、この順にしたがってみていくことにする。

三

(一)述部の末端にあらわれた場合

当方言のイ音尾中、この場合が最も優勢であるが、今、この場合を更に、イ音がどのような母音に派生を起しているかの観点からながめると、優勢な順に、

(イ) a〔〜ー〕〔ー〕……（「〜ヤイ」など）
(ロ) o〔〜ー〕〔ー〕……（「〜〇ロイ」など）
(ハ) u〔〜ー〕〔ー〕……（「〜デスイ」など）

と、三つの場合を認めることができる。

三ノ一

(イ) 〔〜a〕〔〜i〕の場合

この中では優勢な順に、(a)〜ヤイ、(b)〜ジャイ、(c)〜ンニャイ、(d)〜ッチャイ、(e)〜タイなどがあげられる、

(a)〜ヤイ

④ドコヤイ ネ。 どこですかね。(老女→中男) I〔大泊〕

⑤ゴバン ナンヤイ ノー。(籤の) 五番(の賞品)は何だねえ。(少男→中女) T〔高岡〕

⑥タマネギ ヒャクメ イクラヤイ ネ。 玉葱は百匁いくらですかね。(中女→中男) I〔笹川〕

⑦ホー スット エクラヤイノー。そうするといくらですかねえ。〈支払い〉(中女→同) F〔谷〕

⑧ドンダゲヤラ タッヤイ ネ。(部落の調査員がきてから)どれ位か月日がたちますよね。(老女→青男) I〔瑞穂〕

⑨タベマセンノヤイ ネ。 食べませんのですよね。(老女→青男) I〔瑞穂〕

⑩ハナシニ ナランノヤイ ネー。 お話しにならないのですよねえ。〈非難〉(老女→青男) I〔大泊〕

⑪グートモ ユワンノヤイ シテ。(すっかりまいって)一言もないのですがね。(中女→同) F〔大丹生〕

⑫トー アカンノヤイ シー。戸が開かないのですよねえ。(老男→中女) F〔細呂木〕

⑬ウララノー ワカイ トキノヨーニ モー トチガ ナリマセンノヤイ トコト。 私たちの若い頃のように今はもう栃の実がならないのですってばよ。(老女→青男) F〔大桐〕

⑭ダイブ タッガヤイ ザー。 大分たつのですよ。(老女→同) I〔富来〕

⑮ホンナノヤイ ケー。 そうなのですよ。(中男→老男) I〔折戸〕

⑯ホンナヤイ トイナー。 そうなのですよねえ。(老女→青男) I〔折戸〕

⑰ホーヤイ ノ。 ブシュカラ キタンヤ ワイノー。そうですよね。(あの人は)武州から来たのですわねえ。(中男→青男) F〔大丹生〕

⑱ナンガッヤイ。 何月ですかい。〈問い〉(中男→少男) I〔富来〕

⑲ナーン アロヤイ。 どうして(ねうちが)あるものかい。(中男→同) F〔北中〕

⑳ヘケン トーラン コトヤイ。 世間に通らないことです。(老男→青男〈息子〉) I〔折戸〕

㉑ヨメドリッテ ソンナ ハヨ コレン モンヤイ。 嫁取りというものはそんなに(嫁さんが)早く出むいて来れないものです。(老男→同) I〔富来〕

(b)〜ジャイ

㉒ナーンジャイ ノ。 ホレ。 何ですってえ。それは。(そんな肯けないことは) (中女→青男) F〔北中〕

㉓ドンジャイ　ノー。どうかいねえ。（中女→同）I〔橋立〕

㉔ナンジャイ　ヤー。何ですってばよ。〈問い返し〉（老女→子男）　F〔宇津尾〕

㉕ナンジャイ　シー。何ですかね。（中女→同）　I〔名舟〕

㉖アカラ　ナンジャイ　ヤー。女どもどうしたことだねえ。〈とがめ〉（中男→青女）　F〔河野〕

㉗ホージャイ　ノ。ナニ　ソンナ　アル　カイノ。そうですともよ。どうしてそんな沢山あるものですか。（老男→中女）　F〔梅浦〕

㉘ハコエ　ツメレバ　オモタイ　モンジャイ　シー。（巡回力士の所持品は）箱につめると重たいものですよ。（老女→同）　T〔西赤尾〕

……

㉙ナーンジャイ。何ですかい。（少男→同）　F〔持穴〕

㉚オキャクサマ　ドッカラ　キテゴザルジャイ。お客さん（あなたは）どこから来ておられるのですかい。（老女→青男）　I〔赤神〕

㉛トーショリッチュ　モンワ　ソンナ　モンジャイ。年寄というものはそんな（愚痴な）ものです。（老女→同）I〔菅来〕

㉜コレ　ドコデ　ハジスンジャイ。この柱ぬきはどの部分で（蓋を）あけるのですかい。（中男→中女）　F〔細呂木〕

（c）〜ンニャイ

「〜ンニャイ」は、主として「〜のや」の言い方にイ音の派生をみたものと考えられる。（但し、○ナンニャイ　ナ。などのものは別）

㉝ナーンニャイ　ノー。何ですってねえ。〈反撥〉（中女→青男）　F〔細呂木〕

㉞ナンニャイ　ナ。何ですかね。〈冗談にいぶかしさを装って〉（中男→青女）　I〔能登三井〕

㉟ノボルチャン。ホンナ　コト　シテ　ドー　シンニャイ　ノー。のぼるちゃん。そんなことしてどうするのですか。（駄目ではないの）〈詰問〉（中女→子男）　F〔勝山〕

㊱ハヤク　コラレン　カ。ナンヤイ　ユーテ　コーユー　モンクバッカシ　ユーテンニャイ　ネー。早く来ないか。どういうわけでこのような不平ばかり言っているのですかねえ。（中女〈母〉→子女）　T〔高岡〕

㊲イマジョー　ワザニ　カミ　ユイニ　イキマシタンニャイノ。今庄（地名）までわざわざ髪を結いに行きましたのですよ。（老女→青男）　F〔大桐〕

㊳ウラ　スグ　イッテ　キタンニャイ　レー。僕すぐ行って来たのですよ。（少男→同）　F〔秋生〕

……

㊴ドー　シンニャイ。どうするのかい。（少女→同）I〔赤崎〕

㊵ドコ　アケテ　キタンニャイ。どこを開けて来たのですかい。（つまらないったら）〈とがめ〉（中女→子女）　F〔細呂木〕

㊶タベル　ヒト　ゴザンニャイ。（今でも稗を）食べる人がおられるのです。（青女→青男）　I〔赤崎〕

（d）〜ッチャイ

㊷ナニガ デル コッチャイ キャ。どうして（町へ）出ることがあるものですか。（ありませんよ）〈反語〉（老女→青男） T〔蛭谷〕

……

㊹ナッチュー イバッチャイ。何とまあくすぶることですかい。（中女→青女） I〔大道谷〕

㊹デンシャニ セル コッチャイ。電車あそびにしろよ。（子男→同） I〔皆月〕

㊺ベッチャイ。違うよ。（老女→同） I〔富来〕

（e）〜タイ

㊻ドコニ アッタイ シテ。どこにあったのね。（老女→同） I〔腰細〕

㊼ダレヤッタイ ヤー。誰だったなあ。（少男→同） I〔向田〕

㊽アレー イッカヤッタイ ヤー。あれは何日でしたかねえ。（老男→青男） I〔祖母ケ浦〕

㊾チンチャーイガ イッピキ オッタイ トー。（あの人には）幼い子供が一人おったのですと。（老男→青男） I〔祖母ケ浦〕

㊿ヨー シタイ ノー。ありがとうねえ。（老女→子男） I〔白峯〕

51ヨー サッシャイマシタイ ノー。ありがとうございましたねえ。（中女→同） I〔大道谷〕

……

52オレノ ナンジャラ ハキモン ドコ イッタイ。わたしの何ってそれはきものはどこいったかい。（中女→同） I〔向田〕

以上に挙げた諸例は、すべて〔i〕音尾が、〔a〕母音の後にみられるものであるが、これらに次いでは、〔o〕母音の後にあらわれているものがとりあげられる。

三ノ二

(ロ)〔o〕〜〔ー〕〔i〕の場合

この場合は、主として、（a）〜〇ロイとなるもので、そのほかに、（b）〜マショイなども認められる。

（a）〜〇ロイ

53（そんなこと）エータテテ ドー ナロイ ヤー。そんなことと言ってもどうなろうねえ。（青男→同） I〔甲〕

54カーチャン イマ ウミカラ キタノニ ナニ アロイ ノー。母ちゃんは今海（の仕事）から帰ったばかりなのに（おやつなど）何あるものかねえ。（中女→子女） I〔橋立〕

55アソコノ バンジャロイ ネ。あの家の番でしょうね。（中女→同） F〔北中〕

56デキルヤロイ ネー。できるでしょうねえ。（中男→同）

F〔湯尾〕

㊼エッタヤロイ ネ。 行ったでしょうね。（中女→青男） I〔門前〕

㊽ジー カイテ ナイヤロイ ヤー。 （あの紙には）文字が書いてないだろうよお。（少男→同） I〔笹川〕

㊾キーテ クレッテヤロイ ゾー。 聞いてくれというってでしょうよ。（青女→青男） I〔腰細〕

㊿ヤッパシ シンバシヤッタロイ カー。 やはり新橋だったでしょうか。（老女→青男） T〔猪谷〕

……

(51)エッツヤッタロイ。 シンブン デテイタ ネー。 何時のことでしたか。新聞に出ていたねえ。（中男→同） I〔笹来〕

(52)ココワ ヒッカカルデスヤロイ。 ここは（魚が網に）かかるでしょう。（老女→同） F〔梅浦〕

(b)〜マショイ

(53)マー イッテ キマショイ ヨノー。 ちょっと（仕事に）出かけて来ようわねえ。（老女→同） I〔大道谷〕

(54)ソー シマショイ ヤー。 そうしましょうわねえ。（中女→同） I〔白鷺〕

また、これらのほかに、

(55)コノ ヒトナレバコソ カー。 ダレ キコイ ヤー。 この人（筆者）なればこそよ。（老人のくりごとを）誰が親身になって聞こうかね。〈反語〉（老女→青女） I〔向田〕

などの言い方もきかれた。

三ノ三

(ノ)〔〜u〕〔i〕の場合

ここでは、(a)〜デスイ、(b)〜ドスイ、(c)〜マスイがとりあげられる。

(a)〜デスイ

(56)ソシタラ イクラデスイ ニヤ。 そうするといくらですかいね。〈支払い〉（中女〜老女） T〔氷見〕

(57)ソーデスイ ノー。 そうですねえ。〈肯き〉（老女→青男） F〔三谷〕

(58)ココノ モンデスイ ガイノー。 この土地の人ですがねえ。（中女→青男） I〔千里浜〕

(b)〜ドスイ

(59)（〜と）オマウンドスイン ニヤ。 〜と思うのですね。（中男→同） F〔大比田〕

(60)ホードスイ ナー。 そうですねえ。（中男→青男） F〔立山〕

(c)〜マスイ

(61)ホシマスイ ヨノー。 （栃の実は）干しますとねえ。（老女→青男） F〔大桐〕

三の四

当方言のイ音尾にあっては、右にみてきたような「述部の末端にあらわれた場合」が、最も優勢で、イ音尾の大半を占めている。

これをイ音尾と、その直前の母音との関係においてみると、すでにふれたように、いわゆる広母音の〔a〕〔o〕に続くものがほとんどで、その点狭母音〔u〕に続くものは、わりと振わないが、（イ音尾参考一覧表参照 二〇頁） どのような音の並びを示すにしても、それぞれに、一種リズミカルな音感のよさをかもし出していることが注意される。就中、「〜ジャイ」・「〜ーンニャイ」「〜ッチャイ」一連のものは、拗音に伴われることによって、特異なニュアンスを感得させもしている。

今、イ音尾の生ずる諸々の場合を、語法の観点から見返してみると、イ音尾のほとんどが、断定の助動詞「ヤ」「ジャ」「ヤロ」「ジャロ」「デス」「ドス」などの末尾に派生していることが注目されよう。

一体に、断定の助動詞の末尾に、イ音尾がよくあらわれるという事実は、文表現上、そういう文勢にかかわる事柄としてみることも許されよう。これを更につぶさにみると、「どこ」（①④㉚㉜）・「なに」（⑤㉔㉕㉙）・「いくら」（⑥⑦㊻）・「どう」（㉙㊴）・「いつ」（㊶）などの、いわゆる疑問詞を含む問いの文表現、あるいは、「なに」を用いたとがめの文表現（㉒㉖㉞㊳）反撥の文表現（㉝）、反語の文表現（⑲㊷㊹）、また「どう」を用いたとがめ（㊹）、詰問の文表現（㊸）などの、述部の末端にあらわれているものが、大半を占めていることが注目される。のみならず、「〜ンしャイ」（⑨⑩⑪⑫⑬⑳㉑）・「〜ナイヤロイ」（㊽）など、一連の打消法の文表現述部末にあらわれやすいことも、あわせて注意される。

こうみてくると、イ音尾を生んでいる表現法それぞれに種差はあるとしても、それらはつまりは、なんらかの程度の強調をはらんだ表現として受けとれるもののように思う。

既掲のイ音尾は、微視的な見方からすればいずれも、一定の助動詞の末尾にあらわれているとみられるが、文表現の観点に立てば、これらはすべて、述部の末端に派生したものとして受けとられるのである。

さて、同じく述部の末端とはいっても、

注3 〔A〕文末部を伴う場合の述部の末端
〔B〕文末部を伴わない述部の末端

のように二種に区別でき、それにしたがってイ音尾の表現上の効果も、また相違すると言わねばならない。

すなわち、前者〔A〕においては、文末部を後にひかえての、述部までのまとめづけを、ごく自然に示す方向にはたらき、結果的には、文末部の自立性を助長しているようであり、後者〔B〕にあっては、

⑱ナンガッヤイ。 何月ですかい。

のように、イ音は、遊離独立の座をかち得ること――すなわち文末詞たり得ないまま、せいぜい文末詞的機能をになうにとどまっていると言えよう。

四

〔二〕文末部の末端にあらわれた場合

②アッツイ ノイ。

の、「ノイ」というように、文末詞の末尾にあらわれる場合であるが、〔一〕の述部の末端にあらわれた場合に比べて、種類には乏しい。調査の現段階では、「ヤイ」「チャイ」・「ノイ」「ヨイ」などが認められる。

(イ) 〔〜a〕〔〜i〕の場合

(a) ヤイ

⑫アイサッサリ ヤイ。 さようなら。＜別れのあいさつ＞（中女→同） T〔西赤尾〕

(b) チャイ

⑬ソコノ カーチャン ドコ イッタッチャイ。 あなたのところのおばさんはどこへ行ったのかい。（老女→中女） I〔富来〕

(ロ) 〔〜o〕〔〜i〕

(a) ノイ

⑭ハヤイ ノイ。お早いねえ。（青女→中女） T〔西赤尾〕

②アッツイ ノイ。 お暑うございますねえ。（中女→中男） T〔西赤尾〕

(b) ヨイ

⑮アイ ヨイ。はいよ。＜返答＞（中女＜母＞→子女） F〔勝山〕

⑯ヨーシタイ ヨイ。ありがとうねえ。（老女→子男） I〔白峯〕

富山県東礪波郡上平村西赤尾部落できかれる⑭②の言い方は、それぞれ、

○ハヤイ ノー。早いねえ。

○アッツイ ノー。暑いねえ。

より待遇度の高い表現として、主として、青年以上の女性に用いられている。この土地では、もともと「ナ」ことばより待遇度の高い「ノ」ことばではあるが、それをこえて更に高まろうとする待遇心意が、おのずとイ音尾を誘い、やさしみを伴う女ことばたり得ていると考えられよう。

同じようなことは、⑫と

○アイサッサリ ヤー。さようなら。

との比較においても言えることである。

また、⑮⑯にみられるイ音尾も、幼な子への返答なり、ねぎらいに、やさしさをこめようとする表現心意が、あずかりはたらいたものとみられよう。

このように、文末部の末端にあらわれた場合は、述部の末端にあらわれた場合とは逆って、文表現を頂点的に支える文末部の末端にあらわれているだけに、文の表現効果、主としては待遇効果上重要的な関係を示している点が注意される。

五

〔三〕間投部にあらわれた場合

(イ)〔〜a〕〔i〕

○ホライ

㊼ソレガ　ホライ　ブンリサンガ　ツコトッタンニャ　ワノー。それがそら文利さん〈人名〉が（公金）を使っていたのですわねえ。（中女→青男）　I〔門前〕

㊽マチ　エクンデモ　ホライ　チョットモ　ハズカシ　ナイデスガノー。町へ出るのでもそら少しも恥かしくないのですがねえ。（中女→青男）　F〔中野俣〕

㊾エマ、ホライ　カッチャマデモ……。今はそれ勝山の土地でも……。（老男→青男）　F〔岩屋〕

㊿ドー、ユータ　トコデ　ソンニ　ホライ……。どう言ってみてもそんなにそれ……。（老男→青男）　F〔三谷〕

(ロ)〔〜u〕〔i〕

○ナンデスイ

(51)ソレオ　ナンデスイ　ノー……。それを何ですねえ……。（老女→青男）　F〔持穴〕

(52)ソノ　モンワー　ナンデスイ　ノー……。そのものは何ですねえ……。（老女→青男）　F〔持穴〕

間投部にあらわれた場合のものは、調査の現段階では、㊼〜(80)などの「ホライ」にあらわれているもの、(81)(82)などのように、「ナンデスイ　ノー」と文的な間投部にあらわれているものが指摘される。

福井県、旧大野郡地方などによくきかれる「ホライ」のイ音尾は、間投部にふさわしい軽やかな音相のしあげにあずかっている。

一方、「ナンデスイ　ノー」は、これだけが一つの単位として間投部に慣用されているが、ここでも、イ音尾は、間投部にふさわしいリズミカルな音相の形成に、ごく自然なあずかり方を示していると言えよう。

このように、間投部にあらわれたイ音尾は、一種軽快な音相にあずかって妙である。

六

〔四〕その他の場合

〔一〕〔二〕〔三〕とみてきて、そのいずれにも属しないが、しかもイ音尾と同似的地位にあるものを、〔四〕その他の場合として整理すると、おおよそ次の場合に分けられる。

〔1〕文末部を伴う文の述部の末端にあらわれた場合

(い)形容動詞連体形ーイ

〔〜a〕〔i〕

(83)アンナ　ダメナイ　ゾ。あんなものはつまらないのよ。（中女→子女）　I〔剣地〕

(ろ)準体助詞―イ

〔～o〕
〔i〕

㉞ソレ　ドコノイ　ヤー。　それはどこのものなのかい。（少男→中女）　I〔皆月〕

(は)動詞命令形―イ

〔～e〕
〔i〕

㉟カイテ　クレイ　ヤー。　書いてくれよぉ。（子男→青男）　I〔鶴来〕

㊱ウチ　イレテ　オケイ　ヤー。　家の中へ入れておけよぉ。（子男→同）　I〔鶴来〕

〔2〕文末部の内部にみられる場合

(い)ゾヤイ○

〔～a〕
〔i〕

㊲ダサッタ　ウッチ　ゾヤイナー。　みすぼらしい家ですよね。（老女→老男）　F〔杉沢〕

㊳ツイ　サキ　ゾヤイガー。　ついさき方ですよ。（老男→青男）　I〔祖母ケ浦〕

(ろ)〔トコトイ○〕

〔～o〕
〔i〕

㊴センナ　トコトイヤ。　するなってばよ。＜叱り＞（中男→中女）　F〔北中〕

㊵ソンナ　モン　ナニガ　モットク　コトイニョネ。　そんなものの（昔の織機）は、どうして（今まで）もっているものでしょうか。＜反語＞（老女→青男）　T〔四方〕

(い)㉝は、他要素からの転成を思わせるもので単純に、イ音尾と考えるには問題を残すものであるが、ろ㉞は、文末詞「ヤー」によって、自然準体助詞「ノ」に派生をみたとも考えられよう。

(は)㉟㊱は、近古の頃によく用いられた語法と同趣のもので、いわゆる音尾とは、多少趣を異にしているが、（上接母音も、これまでのものとは違って〔e〕である）藤原先生の御教示によれば、今日では、大体、これらは、近畿・四国地方では「～エイ」の傾向、他地方では「～エー」の傾向を示しているとのことであるから、その点からすると、この場合の「クレイ」「オケイ」とある形も、結果的には、イ音尾一般の場合と同じ効果をもたらすことにもなっているようである。

これら〔I〕の場合のイ音の効果は、先にみた〔一〕の〔A〕（九六頁下段一二行参照）に準じて受けとることができよう。

また、〔2〕の(い)は、復合を認め得る文末詞の内部に、それぞれ「ゾヤ」・「〔トコト〕」に次いであらわれているもので、他要素から

の転成を思わせもするが、結果的には、イ音尾らしく受けとれるものである。

このように、〔目〕として整理したものは、イ音尾としての素姓が判然としないものであるが、共時的には、いわゆるイ音尾とほとんど同似的地位にあるものとして受けとれるものである。

七

以上みてきたように、北陸道方言のイ音尾は、性別とか年令などにほとんどかかわりなく、地域的にも、わりと広くおこなわれており、それも、文表現へのあらわれ方からすれば、述部の末端にあらわれるものが大半を占めている。中でも、「問い」「とがめ」「詰問」「反語」「打消」表現などの、述部末の断定の助動詞に伴われるものが、相当に優勢であることは、必ずしも偶然の傾向とはみなしがたい。（イ音尾参考一覧表参照）

一体に、イ音尾の派生現象は、一見機械的におこなわれているかのようでもあるが、由ってくるところを求めるならば、やはり、表現者の、どんな程度にかの強調的な発想に負うているとみなすことができるように思う。

イ音尾参考一覧表

事象	述部の末端											間投部	その他の場合					
あらわれる位置	～ヤイ	～ジャイ	～ソニャイ	～ッチャイ	～デスイ	～ドスイ	～タイ	～スイ	～マス、ショイ	～〇ロイ	ヤイ	チャイ	ノイ	ヨイ	ホライ	ナンデスイ	ノイ	(い)形動連体形イ	(ろ)格助詞イ	(は)動詞命令形イ	(い)ソヤイ〇	(ろ)〔ナコトイ〕〇
前接の母音〔a〕	○	○	○	○			○			○		○	○	○	○			○			○	○
〔o〕									○	○			○	○					○			
〔u〕					○	○		○								○						
〔e〕																	○			○		

一方、音相の面からみるならば、イ音尾は〔a o〕の広母音にしたがってあらわれやすく、開えの大きい母音に隣って、みずからを従属的な位置におちつけがちである。（イ音尾参考一覧表参照）その故にこそ音尾であろう。

したがって、イ音尾が、

⑳ヘケン　トーラン　コトヤイ。　世間に通らないことです。

のように、文の末尾に派生をみても、文末詞的機能を果すにとどまって、文表現を頂点的に支える文末詞の次元位には立ち得ずに終っている。このことは、イ音尾を携える一連の音節にかぶさるアクセントの相によっても肯かれよう。

例えば、文末の「ージャイ。」についていえば、「ージャイ。」とか「ージャイ。」とかいうように、イ音の部分だけが高くなったり、高くなってのびる場合などは認められない。

加えて、文末部として立つには、開えの小さい、不利な〔i〕母音であることも、ここに考えあわされる。

その点からすれば、富山・岐阜の県境部落できいた。

㉑ソイガダ　イー。　そうですよぉ。（老女→青男）　T〔格〕

は、文末詞として認め得る珍らしい例ではあるが、筆者の調査範囲では、今日のところ、北陸道方言に、この種の傾向が起りつつあるとは認めがたい。

以上は、今日までの調査結果を整理したものであるが、更に精緻な調査によって明らかになる事実も多いことと思われる。が、今日なりに、北陸道方言のイ音尾の大要を、右のように受けとることは許されようと思うものである。

注1 2
藤原与一先生、「文法篇」第二節述部の機能、一形態、音相と表現味　日本方言学二五八・二五九頁

注3
〔A〕の該当文例17・22～28・33～38・42・46・51・53～60・63～65・66～71
〔B〕の該当文例18～21・29～32・39～41・43～45・52・61・62
文例間の……の記号は、〔A〕〔B〕の別を示す。

註4
土井忠生先生訳注ロドゲス「日本大文典」第一巻命令法の現在六二頁第一段参照

附記
㉒本研究は、昭和二九年四月から昭和三四年八月までにおこなった臨地調査の資料によったものである。
㉓北陸道は、福井・石川・富山・新潟の四県を含むが、この研究では未調査の若狭・越後は含んでいない。
㉔この研究は、去る昭和三〇年一一月一三日広島大学国語国文学会で発表したものに、その後の資料を加え、稿を改めたものである。

○当研究あたっては、藤原先生からいろいろと御指導をたまわった。厚く御礼を申し上げる次第である。
また、北陸各地の人々からは、いろいろと御親切な助力をいただいた。ここに心から感謝の意を表します。

昭和三四年九月一三日